

令和3年度佐賀大学研究者国際交流支援事業報告書

令和 4 年 4 月 11 日

国際交流推進センター長 殿

下記のとおり報告します。

1. 国際研究集会名	<p style="text-align: center;">第9回 日本・台湾法学研究シンポジウム ——台湾における新型コロナウイルス感染症対策の最前線——</p> <p>* 申請書には、「第8回」と記載していたが、後述のとおり、「第8回」シンポジウムは、国立勤益科技大学の主催により開催されたため、本国際研究集会は「第9回」シンポジウムとなった。</p>		
2. 事業責任者 (申請者)	児玉 弘	3. 所属・職名	経済学部・准教授
4. 開催期間	<p style="text-align: center;">令和 4 年 3 月 17 日 ~ 令和 4 年 3 月 17 日</p> <p>* 申請書には、オンライン開催の場合、令和4年1月20日開催と記載していたが、講師都合により、上記日程での開催となった。</p>		
5. 参加者数 ※参加者名簿(様式任意)を添付	<p>参加者数 <u>62</u> 名</p> <p>うち、外国人数 <u>24</u> 名、 学生数 <u>6</u> 名 (修士課程以上)</p>		
6. 支援金額	<p>金 額 <u>80,000</u> 円</p>		
7. 招待講師	<p>①所 属 <u>国立勤益科技大学基礎通識教育中心・日本研究中心</u> 職 名 <u>副教授・執行長</u> 氏 名 <u>鄭 明政</u> * なお、国立勤益科技大学は、佐賀大学の大学間協定校である。</p> <p>②所 属 <u>逢甲大學 土地管理學系</u> 職 名 <u>副教授・系主任</u> 氏 名 <u>辛 年豊</u></p>		
8. 謝金支出額	<p>金 額 <u>60,000</u> 円</p>		
9. 国際研究集会の内容	<p>○ 新型コロナウイルス感染症のワクチンの供与にみられるように、台湾との国際交流が社会的にとくに注目されており、かつ、台湾における同感染症に対する対策が国際的に注目されていることを背景として、本シンポジウムを開催した。</p> <p>○ 本シンポジウムでは、新型コロナウイルス感染症に対するとりわけ中央政府の施策について、台湾の状況と課題の報告を受けるとともに、日本の現況と比較することを行った。</p> <p>○ 具体的には、台湾側から、①「台湾におけるコロナ対策の立法作為」(鄭明政氏=台湾・国立勤益科技大学基礎通識教育中心副教授/日本研究中心執行長)、②「臺灣於新冠肺炎疫情期間行政權的運作與檢討(新型コロナウイルス感染症に関する台湾の行政權の運用と検討)」(辛年豊氏=台湾・逢甲大學土地管理學系副教授/系主任)という2つの報告によって、台湾における新型コロナウイルス感染症に対する立法府と行政府による施策の紹介がなされ、それらを受けて、児玉が日本の状況を説明することにより、日本と台湾の新型コロナウイルス感染症対策の国際比較を行った。</p> <p>○ 申請時点では、対面での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、国際的な人の往来が制限を受けたため、オンラインによる開催となった。対面での開催の場合、費用の関係から招待講師を1名とせざるをえなかったが、オンライン開催とすることで、招待講師を2名とすることができ、内容の充実を図ることができたと考えている。</p>		
10. 特記すべき成果・波及効果	<p>○ 本シンポジウムにおける2つの報告およびそれらに対するコメントを活字にして、論文化することとなった。台湾において、台湾法と日本法との比較に関する業績を専門に掲載してい</p>		

る雑誌「台日法政研究」第6号（2022年度中に刊行予定）に査読付き招待論文として掲載される予定である。

- 本国際交流支援事業の採択を受け、鄭明政氏を招聘する連絡をしたところ、同氏が執行長（センター長）をつとめる国立勤益科技大学日本研究中心（「中心」は「センター」の意。したがって、「日本研究中心」は「日本研究センター」となる）が主催する「第8回 日本・台湾法学研究シンポジウム」に児玉が招待を受けた。同シンポジウムは、2021年11月19日、国立勤益科技大学日本研究中心が主催するオンライン上で開催され、児玉は「日本における原発訴訟の意義と課題——東日本大震災後の議論状況——」という報告を行った。本事業がいわば呼び水となって招待を受けた形となった。
- また、本シンポジウムに招待した辛年豊氏からは、2022年11月に計画している逢甲大學土地管理學系海外実地研修（逢甲大學の教員・学生が参加する海外研修）において、佐賀大学を訪問し、経済学部教員・学生との学術交流の機会を持ちたいとの打診を受けた。当方としては、当然のことながら快諾し、この受け入れ準備を進めているところである。この企画も本事業が呼び水となったものである。

※欄内に収まらない場合、適宜、行を追加し、ページを増やしていただいても構いません。

(別紙) 参加者名簿

・日本側研究者

児玉 弘 (佐賀大学)
檉澤 秀木 (佐賀大学)
早川 智津子 (佐賀大学)
井上 亜紀 (佐賀大学)
平部 康子 (佐賀大学)
孫 友容 (佐賀大学)
尾崎 一郎 (北海道大学)
落合 研一 (北海道大学)
菅原 寧格 (北海学園大学)
鈴木 賢 (明治大学)
戸谷 義治 (琉球大学)

・日本側学生 (いずれも佐賀大学)

江藤 慎之佑
奥川 百々
坂倉 可連
瀬戸口 賢三
高崎 花菜子
野田 弥里
服部 稜央
原 快成
古川 真太朗
池田 竜輝
井手段 佑
栗林 真優
小柳 翔悟
高木 空也
田邊 雄次
中村 由加里
花川 貴紀
深堀 明琳
福山 莉彩
竹末 百那
立川 朋斗
土井 大河
中村 航大
西本 光太
古家 翔
光野 瑞起
陳 曉

・台湾側研究者

鄭 明政 (国立勤益科技大学)
周 宗憲 (国立勤益科技大学)
辛 年豐 (逢甲大学)
林 素鳳 (中央警察大学)

・台湾側学生 (いずれも国立勤益科技大学)

賴 好典
陳 煦元
翁 偉竣
徐 千素
蔡 詠揚
陳 柏儒
游 景翔
蔡 木雄
張 瑄芸
劉 芳彤
賴 世傑
謝 侑庭
戴 湘蓉
李 明財
何 柏穎
薛 榮方
邱 顯益
徐 若雅
黃 佳怡
黃 寬議